

協働のまちづくり推進委員会（第6回）結果概要

日時：平成24年10月29日（月）18:30～20:25

場所：八戸市庁別館 2階 会議室B

本会議の結果概要を、次のとおり報告する。

■ 会議概要について

(1) 協働のまちづくり施策の実績及び成果・課題について

・平成24年度に実施された協働のまちづくり施策の実績報告と、成果・課題について、意見交換を実施。

(2) 「元気な八戸づくり」市民奨励金について

・平成18年度から継続している市民奨励金制度を振り返り、今後の制度の在り方について意見交換を実施。

■ 今後のスケジュールについて

○今後のスケジュール（予定）

1月16日（水） 第7回協働のまちづくり推進委員会 開催

■ 出席者（敬称略） ※参考

- ・北向 秀幸 委員長
- ・浮木 隆 副委員長
- ・佐藤 博幸 委員
- ・五戸 保夫 委員
- ・齊藤 綾美 委員
- ・田頭 順子 委員
- ・西島 拓 委員
- ・市民連携推進課（5名）

第6回 八戸市協働のまちづくり推進委員会 議事録

日 時 : 平成 24 年 10 月 29 日 (月) 18 時 30 分

場 所 : 市庁別館 8 階 研修室

■ 次第

- 1 開会
- 2 委員長あいさつ
- 3 (1)協働のまちづくり施策の実績及び成果・課題について
(2)「元気な八戸づくり」市民奨励金について
- 4 その他
- 5 閉会

次第2 委員長あいさつ

【委員長あいさつ等】

■委員長

- ・今日の話は、次第にあるとおり、結構ボリュームがある内容である。
- ・委員会とすれば全体を見るものと一つ細かいところを見るものと両方入っている。
- ・この委員になって私も6年目くらいに入っているので、ちょっと見直しをしたいところを事務局をお願いをしていたところ、今回取り上げていただいている部分もある。
- ・齊藤委員は初めての参加で大変かと思うが、ついてきてほしい。今日はボリュームがあり且つ深い話をしないとまらない内容になっているので、ご協力よろしく願いいたします。

■事務局

～齊藤委員の紹介～

次第3-(1) 協働のまちづくり施策の実績及び成果・課題について

○資料1-1 質疑応答等

■委員長

- ・お手元のA3の資料は全体の既存の施策を網羅して書いていただいているものだ。
- ・今日の趣旨はこれについての情報共有、情報共有というのは「現状はこうなっている」というところの共有をし、これを踏まえ来年度に向けての意見交換をしていただきたい。
- ・そういうことで今日の大きな趣旨は全体の状況総括と来年に向けての意見交換の時間となっているので、事務局のほうから早速この資料を説明していただきたい。

■事務局

～資料説明～

■委員長

- ・事務局から説明のあったA3の資料は大きく分けて三つの内容に分かれている。

- ・一つ目は市民活動関連、二つ目は地域コミュニティ関連、三つ目が推進事業、推進体制の整備であり、今一番先をご説明いただいた。
- ・協働の考え方を改めて説明させていただくと、市民活動はNPO等のイメージがあるが地域の課題を市民活動で解決していこうというものと、地域コミュニティの部分と、それを両方に関わるサポートというか推進体制の整備ということでそういうわけで三つの柱になっている。
- ・その中の奨励金に関しては先ほど事務局から話があったが、今日の次第3-(2)で取り上げていきたいので奨励金以外の内容に意見をいただければと思っている。
- ・意見、ご質問、どちらでも構いません。副委員長、口火を切っていただければ。

■委員

- ・市民提案制度は平成24年度0件だが、23年度の内容を見れば非常に良いものだったと見ている。
- ・だから22年度も0件、23年度1件、24年度0件だが、ないからダメなのではなくて、たまたま出てきた一つの検診受診率の向上というのは非常にいいテーマだったと23年度は思っていた。
- ・提案する市民側もやはり体力がいることだし、そういう意味ではちょっと簡単にこういうのをとって、パッとこういかないのだろうなという感じは受けている。

■委員

- ・市民提案制度の成果のところ、各課で対応している協働事例とあるが、どういうのがあるのか。

■事務局

- ・例えば、「はっち」は「はっち」事務局とアートの団体と協働で事業をしており、観光課は観光関連の団体を含めた例えばJRと協働での事業を、それぞれこの制度を通さなくても自分たちで進めているという事例がある。
- ・また、中学校の校庭の整備などは三条中、市川中、白銀南で、担当課を通じることなく直接教育委員会と地域とで話し合いをして費用の負担と労力の負担ということを行った。
- ・公園の整備についても公園緑地課と地域が直接やり取りをして費用と労力の負担を分担し、協働で公園整備を行った事例があった。
- ・白銀駅の駐輪場と公衆トイレの部分も整備は行政、管理はすべて地域が管理をするという事例が出てきている。様々なところで様々なパターンでやりかたが出てきているという状況である。

■委員

- ・今出た事例の中に私も直接関わった地域もあった。

■委員長

- ・そうですか。ちなみに協働というくくりで委員会とすれば認識していたわけなのだが。

■委員

- ・市民提案というかやはり地域の活性化というのがそういう事業を地域の様々な話合いの中で行政が協力してされたということなのだろうと思うけれど。

■委員長

- ・提案制度も予算化しなければいけないものなので、ある意味重いといえは重い。
- ・そのせいか、割とこれは件数が少ない。
- ・どちらかという自分たちだけで活動できる、奨励金のほうがやり易いイメージがある。
- ・ただ先ほどの意見のようにやってみると結構重いだけに幅が広く、大きい事業になっている。

■委員

- ・平成24年度の提案制度について、途中まで話が進んでいたと思う。どうなっているか。
- ・教育委員会からの提案だったかと思う。提案の段階ではゴミ箱の関係だったような。

■事務局

- ・ゴミ箱アダプト制度（アメリカの事例）のように、商店街などと協力してゴミ箱オーナーになってもらうという提案があった。
- ・しかし、環境政策課としてはゴミ箱を設置しない方向で進んでいた中で、教育委員会からゴミ箱を設置していこうという提案があり、そこでちょっと齟齬が生じた。打ち合わせをした中でやはりこれは今回取り下げたいという話になり、残念だった。

■委員

- ・市民活動サポートセンターについて、14年度から10年経って団体が増えているが、総利用者数が10年前と同じで、増えていないようだ。これはどういう傾向でなっているのか疑問がある。
- ・普通であれば団体が増えていけば増えているような気がする。10年前の人数に納まっているのはなぜか。

■委員

- ・平成24年は9月現在のデータだからではないのか。

■事務局

- ・9月末現在である。ただずっと経過を見ても大体5,000~6,000人の間で推移しているので、サポートセンターが出来たばかりの時と比較して、今現在は効率的な使用がなされるようになってきたことが考えられる。
- ・その打ち合わせスペースと、コピーをしたり書類を作成したりする作業スペースなのだが、作業のスペースのほうは、立ち上げた当初は非常にたくさんの方が来て一緒にやるというところもあったが、今は慣れてきたのでお一人だけ来てさっさと作業をして帰られるというようなことになってきている。
- ・それから「はっち」が出来てから「はっち」でのスペースの活用というのも出てきているという状況があるので、打ち合わせや作業をする場合に活用できる場所が少し分散してきているのではないかなと思っている。
- ・「はっち」の機能の状況について実は詳細を調べたいと思っているところなのだが、まだ会館して1年なので。
- ・サポートセンターの登録団体に毎年アンケートを取っているのですが、来年くらいには、そういったところに少し踏み込んだかたちでの調査をしてみたいと思っている。

- ・実際に「はっち」のほうにシフトしていくのもあるのではないのかなと思う。
- ・最近の事例としては、サポートセンターの場合、今はインターネットで情報提供をしているのでいちいちそこに行かなければ情報がもらえないという状況でもなくなってきている。
- ・だから登録することによって足を運ばなくてもインターネットなどを通じて情報提供を受けられることができる。そういった部分も関係しているのではないかな。

■委員

- ・活動している様子がない登録団体も見受けられるということで、それでも年に何回か「登録しますか、しませんか」というかたちで、多分活動していない団体を「登録しますか。」という感じで確認していると思うが。
- ・この施設を利用することが少ない団体ということは実績というのがなさそうだというの理解できるが、活動していなくても登録してほしい気がする。

■事務局

- ・登録の更新を「無理にしてください」というよりも「どうしますか」ということで毎年確認している。
- ・実績的なものが出てこないのだけれども登録の更新だけはしているというような団体も見受けられる。ただ私たちは総てを把握しているわけではないので、もしかすると見えないところで活動しているのかもしれないが、どうしても人が育っていかないと段々に高齢化していった活動が縮小していくなど、そういう団体も中にはあると思う。

■委員

- ・個人的に市民提案制度というのはすごく良い制度なので、私はこういうのはずっと残ってなお且つ活力が出るような状態を作っていきたいなと個人的に思っている。
- ・その提案制度そのもの一般市民にどれだけ認知されているか理解されているかということになるとはなはだ心もとないような気がする。
- ・その提案制度そのものが、「どんな提案をすればいいのか」「どういうふうな手順を踏んで提案すればいいのか」というところが戸惑いとしてあるのではないかなという気がする。
- ・過去の実績の中で本当に純然たる市民からの提案というかたちでなったケースというのはこの実績の中の18年から24年までの間であるのか。

■事務局

- ・ある。外国語を母国語とする児童・生徒に対する日本語教育支援事業は市民からの提案だ。

■委員

- ・これはいわゆる行政の側も協働で取り組んだ事例ということか。

■事務局

- ・今現在も継続している。教育委員会で毎年行っている。外国人と結婚した方、あるいは外国人の方で移住してきた方など、お子さんが学校に入ってからどうしても言語的な問題でなかなか学習が追いついていかないという現状があるということで、日本語を普通の授業とは別に教えるというようなことをやっている。
- ・さらにこの中では、協働で創り上げる新しい「みなとまち八戸」推進事業も市民側からの提案で実施された事業である。

■委員長

- ・事例集のようなもので紹介していたか。

■事務局

- ・ホームページ上で詳細ではないが、アップしている。

■委員長

- ・つまり、何で事例を見られるのかということだ。
- ・ホームページが一番簡単なのだが、ホームページが対応していけるか。実際必要になった時に電話をかけて聞くのか。もうちょっと見やすくなるのがあればよいが。
- ・市民からの自由提案は市民の方からの応募のほうが、実際基本的には知りたい。だからこそ公開するのであればこちらのほうを詳しく載せてほしい。そのへんをちょっと確認しておいていただきたいという意見だと私は思った。

■委員

- ・私は市民活動のサポートセンターにも結構かかわっているので、いわゆる各団体さんの実態というのも、分かっているつもりだ。
- ・各団体さんからの市民提案による事業ということになってきた場合に、多くの団体さんは活動資金に事欠くような団体さんがほとんどだから、事を起こすということになるとどうしてもお金がかかるから、そのへんが第一歩を踏み出す最初のハードルではないかと常々思っている。
- ・だから実現性はともかく、まずその思いなりアイデアなりをパッと発表する場みたいなものが先にあると市民側はそういう思いがあるのかということを知ることができると思うので、そういう場がもし持てるのであれば今後思いつきの段階でいいから聞いてあげてほしいな場を設けて欲しい。

■委員長

- ・発表の場は確かあったと思ったが。

■事務局

- ・活動成果の発表会のときに提案制度も発表している。

■委員長

- ・1年に1回だが、その場面で見るとは、ただそれは1年に1回の限られるというやり方なのでタイミングの問題もある。

■委員

- ・市民提案制度は、この件数が減っているというのはほかの事業との兼ね合いもあってということではないのか。事業が増えてきていたりする面も、そういうことではないのか。

■委員長

- ・私も委員を6年やっているが、実は関わって1件、2件である。提案があると、協議する相手先が多いのもあって、途中まで話が進むが、やはりしないというのが毎年ある話だ。
- ・打ち合わせの段階では話は早く来ていても、かたちになるまでは結構ハードルが高いかもしれない。
- ・ある程度協議してかたちにしていかなないと事業まで行き着かないところがあり、そこは制

度的にはステップ的には結構それはそれで関わらせるところが多いから協議の時間がかかることはある。

- ・平成 22 年は 0 件で終わってしまったが、今年もまず応募者のない状況だが、1 件、2 件の継続はずっとしているかたちではある。
- ・減少傾向を一応課題として出してあるわけだからそのへんを実際減少傾向と取るか、横ばい傾向と取るか。わたしは横ばいかもしいないと思っているのだが。

■委員

- ・提案制度を使わず、どこかでそういうのをやっているのもあるので、横ばいという認識でいいのではないか。

■委員長

- ・ここで各課の協力がないと成り立たないことで、市民連携推進課さんの中だけでは解決しないので、本当にこれは調整が大変だろうと思ってこの制度を見ている。

■委員

- ・②の提案制度ではなく、⑥の学生地域貢献表彰制度の話になるが、学生の考え・意見を行政の制度に取り入れるということはとてもよいことだ。それだけ行政の間口を広げているということだからとてもよい。
- ・学生だけではなく若い人たちの意見をどんどん取り入れる対応とか対策的なことをよく考えてほしいと思って今見ている。
- ・書類審査などは、役所の提出書類のしかたなど、一般の市民からするとなんだか難しいと思う。
- ・だからこの書類審査だけではなくて、書類審査ではわからない部分もあるので、面接するなど、そういうもう一步踏み込んで具体的にこっちから入って行って、その彼らの気持ちや考えを具体的に生かせるかどうかをこっちから積極的に関わってもいいのかな、やるべきではないかなと思う。

■委員長

- ・学生さんは結構面白い。私もやらせていただいているが、非常に面白いしなかなかアイデアはあってもかたちになるのが難しかったりするけれど、これは割と盛り上がっていくのではないかなと私自身は思っている。
- ・今度 2 月にまた発表会があるので是非それは見ていただければと思う。
- ・時間が正直なところだんだん厳しくなっているんで、2 番・3 番と地域コミュニティと推進関連整備のことを一緒にやらせていただきたいと思うが、よろしいか。奨励金の話が実は今日、結構重い話しなので。では、2, 3 番の資料両方使って状況説明をお願いします。

○資料 1-2、1-3 質疑応答等

■事務局

～資料説明～

■委員長

・では、市民奨励金を除いたところでご意見ご質問どうぞお願いします。

■委員

・⑫番の協働のまちづくり研修会の中の地域リーダー応援講座の内容をどのようなものか教えてほしい。

■事務局

・地域リーダー応援講座はもともと市民向けの講座としてやっていたものの一つを町内会長さんを対象とした研修会に振り向けたものである。

・平成 22 年度からこの講座を開始しており、平成 22 年度の第 1 回目は「町内会の情報発信・みんなに伝わる広報～『伝えたい』が伝わる情報発信のコツ」ということで広報に特化した内容となっている。

・平成 23 年度の第 2 回目は「地域の人材発掘！参加者・担い手の集め方の秘訣」ということで人材発掘に重きをおいた講座となっている。

・平成 24 年度、今年度は 1 月 26 日に立川市にある大山自治会という町内会加入率 100 パーセントの自治会があるのだが、その女性の自治会長さんと呼んで加入率を上げるためにはどんなことが大切なのかといった内容を考えている。

■委員

・今年は定員が一杯になったというのはやはりテーマがタイムリーで、実践派の町内会長さんをお招きして話を聞くのだからやはり人気があるのだろう。一番困っているところを聞きたいものだから。

■委員

・今のページで職員向け研修会というところがあるが、平成 20 年度が 60 人で 24 年度は 35 人ということで半分近くに減っているわけだが、それも多いのか少ないのかどんな職員の方たちがこれに参加しているのかをお聞きしたい。

■事務局

・職員向け研修会は、基本的に地域担当職員は極力出るようにしていただきたいということで、こちらからご案内はしている。

・ただ地域担当職員だけではなくて広く一般の職員の方にも参加してほしいので、全庁内にはアナウンスはしてしている。人数の多さでいうとおそらく担当職員が現在 46 で、どうしても各担当職員も自分の部署での業務を持っているので、プラス一般職員も入れて 40 名くらいが妥当なのかなという感じである。

■委員

・勤務中に行う研修だから、どうしても業務を離れられない人たちもいるということだ。

■委員

・年に 1 回だけだけれど、1 回で習得できるのかという部分が気になる。

■事務局

・この研修会以外に新採用職員研修の中に協働のまちづくりというプログラムを入れていただいているのと、入庁から 10 年前後の主査級職員研修のプログラムの中にも協働のまちづくりを入れている。

■委員長

- ・別の職員向け研修会で出てしゃべったことが1回ある。人数が多かった記憶があつて60人くらいだった。その時間で人数が多いと伝わらないのではないかと、思つてすごく大変だった。
- ・人数は30人くらいが逆に一番いいかもしれない。60人だとこの会場も向こうまで行つたらもう全然顔が見えなくなつてしまう。5・6年前にやったことが記憶にある。
- ・人数は今でも対象職員は結構割合とすれば頑張つて出てくるほうだという印象なのか。

■事務局

- ・地域担当職員は基本的に協働の意識付けをするということが主目的になっているので地域担当職員が2年ごとに入れ替わりがでてきている。
- ・全員が一度に替わるわけではないので、大体半分から3分の1ずつ人が入れ替わつてきているような状況にある。
- ・そういう中で安定的に30数名が出てきているということは、特に新しくなつた方には極力出ていただくということで進めているので、そういう意味では継続的に人も替わりつつ研修ができていふと思つている。

■委員

- ・⑦番の住民自治推進懇談会だが、当初から大部内容が変わつてきている。
- ・各地域・町内における問題を自分たちで搜して決めるような内容になっているが、そうなるかどうかというと、自分たちの町内だけではなくて他の町内も見るといふのはすごく勉強になるし、いいのではないかと、思ふ。
- ・参加者たちもどちらかというとその地域の会長さんたちだけが出ていふという感じでやつていふので、もっと他も見ませんかという働きかけをすれば、行こうという他何件か見て「こうなんだ」といふそういう前例があるところもあるので、そういう働きかけをしてもらえればいいと思ふ。

■委員長

- ・そういうアナウンス自体はないのか。

■事務局

- ・広報などで「どなたでもご参加いただけます」とお知らせをしていますが、やはり他地域からの参加といふのは少ない状況かと思つている。

■委員長

- ・他地域はOKと書いているわけではないのか。

■事務局

- ・どなたでも参加できると書いている。

■委員

- ・逆に他にまで行くといふのはなかなかないのか。例えば次回自分のところであれば、前の開催地域を見てもみませんかとかそういったことでもいいかと思ふが。

■委員

- ・そういう感じで来ている人が後ろにいたりする。白銀南の次が鮫だとすると、鮫の人が後

ろにいたりするが、その程度だ。もう少し多い方がいいということだね。

■委員

- ・特に大館はすごく勉強になるので、そういうところはもっと見たらよいと思う。

■委員長

- ・アナウンスのしかたなのか、事前じゃなくその場で「これの次の自治懇ありますよ」っていう。

■委員

- ・私たちがであれば行けるかもしれないけれど、偉い人たちはちょっとプライドもあるし聞けないという場合もあるし、やる方も来てもらってもちょっといい話をし過ぎてちょっと困っちゃうなということになる。なかなかそこをこう連合町内会長級になるとやはり難しい。

■委員

- ・地域に出ることについて、話し合いががもうけられるということだが、私はその裏では行政に対する期待が少し低下しているのかなという危惧がないわけではない。
- ・2年に1回のようなのだが、そのとき話し合っても地域とすれば具体的な取り組みというのはなかなか必ずしも見られないところがあるのだが、これなどは行政と関わりがそれこそうまくいってればまた違ってくるのかな、
- ・でも地域に接してこういうのを聞くと、いつもいってもなかなか実現しないと。「役所でも優先順位があるのですよ。全部はいはいとやるわけではないのですよ。」とは言うけれど、優先順位があって徐々にやっていくのしょうけれども、
- ・でもやはり行政に対する要望を聞いてもらうことも必要だし我々がやれることはやっていくことも必要だし、その中で何か少しこう地域の人たちの行政に対する期待が少し低下しているのかなという気がしないわけではない。

■事務局

- ・先ほどの話で他地域の活動を聞くのはすごく参考になるというお話について、今回ちょっとこの資料に載せていなかったのだが、今年度からおらほの地域自慢事業というのをやっており、広報統計課でやっているものと、当課でやっているものと二種類ある。
- ・広報統計課でやっているのはBeFMを使って各町内会長さんや各地域のいろんな活動だったりあるいは自慢できるようなもの、自然であったり歴史であったり様々なことを取り上げて取材していただいたりインタビューをしたりということでご紹介をする番組を一つやっている。
- ・ほかに、実は11月の広報からになるのだが、市民連携推進課で連合町内会長さんから「うちでこういう様々な活動をやっているんだよ」という自慢になる活動をインタビューしたものを掲載するというコーナーを作っている。
- ・毎月載せたいところなのだが、ちょっと厳しくて今1カ月おきか2ヶ月空いたりという状況になると思っているが、そういったものも始めている。
- ・来年度に向けてまたその事業を少し別なたちでの皆さんにいろんな地域でこんな活動をやっているということを知っていただくような場を少し設けたいということも考えている。

■委員長

- ・今の意見は意見として出ましたよということで受け止めていただきたい。できれば言ったことは本当はなんらかのかたちでどなたかからフィードバックがあると本当はコミュニケーションとしてはよい。ダメならダメでしょうがないし。

■委員

- ・この自治懇は隔年になっているので、私はどこかの地域に成功事例を作るみたいな感じにしたらいと思う。
- ・ある公民館を拠点にして成功事例を作るように、きめ細かく回数を重ねて会合を開いて、いい地域課題をこういうふうに出出してこういうふうに取り組んでというストーリーを全部おさえて成功事例を公表していくみたいな手法を取ったほうがいいのではないかなと思うが、そのへんというのは難しいのか。

■委員

- ・㊦の地域づくり会議がまさにそういうふうに行っていきたいものだ。そうすると仕掛けと仕組みを。

■委員

- ・この会議もこれをぱっと見ると江陽と市川と豊崎が飛び抜けて回数が多い。このへんの共通した何か現状のレベルとか進み具合とか何かあるのかと思ったりもするのだけれど、この回数の多いところはどうか、どんな実態になっているのか。

■事務局

- ・これは4年間、3年半くらいの累計の回数になっているので、例えばある年度に特定のテーマで地域づくり会議をどんどん進めてカウントしているというような地域は実は回数が増えていないということもあるかもしれない。
- ・あと継続的にずっとやっているところも出てきているけれども、豊崎などでは例えばそれこそ一昨年度公園の整備のために会議を続けたり、あるいは今年は小学生の駅伝大会をやりたいということでそういったものについての会議を続けていたりというときもあるので、回数が増えてきていると感じている。
- ・地域づくり会議は先ほど話が出たが、住民自治推進懇談会をきっかけに地域の中でいろんなことをやってみたいとか、こういうことをやってみたい、こういうことを検討していきたいということが、多分その自治懇だけで解決するのはどうもないと思われるので、そのきっかけ作りに自治懇がなってくればよいということでやっている。
- ・その住民自治懇談会に市長が入ってそういう課題をちょっと見つけ出していくということが出来れば、次その課題に対して地域づくり会議につながってその中で様々なことを検討して行って実現に向けていくという流れができるのが理想だが、なかなかこの地域も必ずしもそういうふうにはなっていないということが悩みであり、実態だと思っている。

■委員

- ・私は白銀南地域なのだが、町内会に関わっていないが、自治懇には毎回参加している。どうしても町内会主体になるのでそうすると私も近所の人が町内会長だったりなんかしているので、隣りあわせで座ったりすると珍しいという話になる。
- ・「町内の人ばかり来てるんだ」という感じで、そうすると町内会に関する以外の意見みたい

なのはなかなか出しづらい雰囲気になってしまう。

- ・今回の場合は震災のあとなので震災中心の意見交換になったが、なにせ隔年でやっている関係で、その場で課題が仮に浮き彫りになったとしても、それをどうフォローしていつているのかが全然見えないところがどうしてもある。
- ・だから今、課長が言われたようにそれが引き続き協議しているところがあるというふうにつながってほしい。自治懇と地域づくり会議とつながっていないとすると・・・。

■事務局

- ・きっかけ作りの場である。

■委員

- ・その地域づくり会議と称さなくてもその事実を受けて、例えば今は結構災害・防災が多かったのをそのまま自主防災会のほうの会議のステージで使っているところがあると思う。
- ・だから行政で把握している地域づくり会議でなくても、実はこう下の段階の各種団体と例えば交通安全でも子供会でも、そういうところへ落ちてきての議論はしているのはあると思う。
- ・各種団体の活動は100パーセント把握できない。数は分からないがやっているのは聞いている。特定のテーマはそういう下段の自主防災のまた会議の中でやっている。

■事務局

- ・特に災害の件については、自主防災組織立ち上げなどの打合わせが進んでいるというのがある。
- ・あと実際に過去にも、その自治懇をきっかけに様々な事業が実際に行われていたという例がある。
- ・今、資料が手元にないのだが、自治懇をきっかけにコミュニティ計画を作った地域、あるいは自主防災組織を作ったところ、先ほど申し上げたような白銀の駐輪場だとか公衆トイレなども自治懇がきっかけに動きが出てきたものだったりする。
- ・グラウンド整備も住民自治推進懇談会をきっかけに地域で実際に検討して教育委員会に提案してきた。
- ・だから自治懇のあと全然何も動きがないかということ、そういうことで動いている。やはり地域の皆さんのそれに対する意識と考え方次第ということもあるので、行政で総てフォローが出来るかということ現状ではなかなか難しいのかもしれない。

■委員

- ・今まさに課長が言うように、とっかかりは意識を変えることからはじまると思うので、成功事例を作るみたいなことで、公募してそういうことをやっているのかみたいなのも意識つけみたいなのところからどんどんやるべきで、やっていることをどんどんアピールしていったほうが意識を変える一つのツールになるのではないかなと思う。
- ・ついこの間平間さんのところでやっている活動の新聞みたいなもの(『こなかのかわら版』)を送ってもらった。
- ・あれを見ていて取り組みとしては非常にいいと思うので。ちょっと残念だと思ったのは地

域で行われた行事を知らせているだけなので、独自の取材みたいなので身近ところを拾っていくみたいな記事の作り方してくれればいいのにと私は感想を持った。

■委員長

- ・自治懇はさっきの五戸さんの意見ではないけれど概要では機運と意識向上で目的には達しているが、その先実現に向けてとなるとまたちょっと違う話になる。
- ・言っている人たちは実現してほしいと思って言うから、いくつかは達成するのだからけれど、行政とすれば機運の向上というところで目的は達成しているかもしれないので。
- ・どうしてもボールはこちら側のほうにいつも持っている感じはする。コミュニケーション的な話だと思っているので、この自治懇に関しては実現するかどうかはちょっと当初のペースとすればそこまでは入っていないといえ入っていないのでは。
- ・2年に1回というのは確かにしようがない。

■委員

- ・町内会長さんたちの集まりでも、じゃ各町内でどういう取り組みでどうすればいいのか知らない。
- ・だからここではこういう取り組みをするああいう取り組みをする、町内の取り組みをすることがまた自分はここをやるかという気持ちになる。
- ・共通理解したり他の町内の取り組みを知ったりと、情報交換という場であるし。
- ・特に結論がなし、ないというぐらい皆が意見を言って終わりにするとかね。そういう取り組みをしているが、やはり市長が来ると、「そういう会ではない」と言っても、少しはやってくれるのかという期待感はあるわけだ。

■委員長

- ・自治懇の意味は理解されている。

■委員

- ・最初のころからはある意味変わってきている。

■委員

- ・前はすごい押しが強かった。

■委員

- ・最近はもっとこう少し違ってきた。

■委員

- ・市長が来たからしゃべってけるみたいな感じで、陳情みたいな感じで、これだけ回数をやっているとならば違ってくる。

■委員長

- ・ここで協働のまちづくり施策の実績及び成果・課題についての話し合いは一旦終了して、次へ移らせていただく。
- ・次の「元気な八戸づくり市民奨励金」については事務局に資料作成をお願いしていた。
- ・今回の委員会の最初の時に、今年は特にこの奨励金に関して制度も始まって大部経ったので少し皆さんに議論していただきたいというご挨拶はちょっと申し上げた。

- ・それを踏まえて今日まずこの時間を取ってもらっていた。資料に関して、実は先週、私も一度市民連携推進課に来て、どういう話し合いをしていったらいいのかということで話合った。

次第3-(2)「元気な八戸づくり」市民奨励金について

■事務局

～資料説明～

■委員長

- ・今年初めて審査に関わっていただいた方が半数だったわけだが、実は去年23年度全コース通じて2件しかなかったのも、非常に危機感があった。
- ・初動期1件、事業拡大も1件、地域づくり0件という中で、この制度は続くのだろうかという気持ちが去年あり、今年は見直しをする時間にしたいと思っていた。
- ・ただ幸いにも今年度、初動期は5件にまた増えており、平均というよりもむしろその傾向とすれば初動期は平均以上のある程度の応募数はあった。
- ・制度的な話をするとも、初動期と事業拡大を一緒に審査して、審査上は一緒に並ぶ。平均が7割超えれば奨励金の対象とするという状態になる。
- ・実際に採択数もあるが、まず応募数がある程度あるのかというのが一番不安だった。市民の方へどう受け止められている奨励金かというのが一つのバロメーターだと思っていた。
- ・それが去年非常に少なくてこのままで大丈夫かと思っていたところ、今年はちょっとぶり返している傾向にある。
- ・その中でただ事業拡大に関しては18年初年度は7件の応募があつて、今は1件1件2件という感じになっており、これに関しては初動期と事業拡大の違いがあるかと思うがなかなか動かないという感じを持っている。
- ・地域づくり応援コースに関しては21年度からスタートだが、なかなか数は増えていかない状況にあり、これは何故かということもちょっと考えていきたいと思う。
- ・災害に強い地域づくりコースは11件という大変な数の応募があり、今年実際に審査していただいて全部に交付できなかったというところであった。これはしばらく必要なコースだと思っている。
- ・ということでまずコースが今全部で4つあるけれど、平成18年から動いている2つの奨励金に関しても結構ハードルが高いものは見直しをしなければいけないのかなという話もしている。
- ・今事務局からコースの話とそれから仕組み的にハードルが高ければもう少し方法をやりやすくしようという両方の提案をしていただいた。

■委員

- ・今日の意見を聞いて事務局で制度設計をしてもう1回委員会を開くというのはいつくらいを予定しているのか。

■事務局

- ・12月の下旬ころを計画していました。

■委員

- ・予算要求が終わってからか。

■事務局

- ・予算は現状と同じ枠内で組み換えするかたちで行う予定だ。

■委員

- ・事務局からたたきの説明があつていわゆる事業拡大と地域づくりをこう合体するということに関しては賛成だ。
- ・地域づくり応援コースの場合、地域コミュニティ計画がないと応募できないという非常にしびりがあつて、その計画づくりが各地区で思うようにばんばん出来ていってれば応募できるチャンスのある連合町内会が一杯あるのでしょうかが現状としてそういう状況なので、合体するというご意見、たたき台には私は賛成である。
- ・それともう一つあつた公開プレゼンテーション、公開ヒアリングについて、いわゆる「こういうのはどうなんですか」「こういうふうに考えていまして」そういうものか。
- ・向こうでばんばんこうやりますというのではなくて、公開ヒアリングということのご提案があつて非常に町内会長さんたちにとっては聞きやすい、やりやすいものじゃないかなという印象を受けた。
- ・それと1事業につき1回までの助成ということなのだが、このあたりは2・3回までいいことにしたほうが結局1回で完結できるものもあるだろうし、できないものもあるだろうし、また継続してやった類似事業も同じ事業ではないかと言われるとまた困るので、3回くらいの枠までいいのではという感じは持っている。
- ・公開ヒアリングというのは初動期支援の場合はプレゼンということか。これも公開ヒアリングということか。

■事務局

- ・全部公開ヒアリングでやろうと思っていた。

■委員

- ・全部だとかなり気持ちが楽になる。聞かれたことに答えるくらいだと。自分たちからパワーポイントを使ってプレゼンするとなると抵抗がある。たたき台で説明があつたというところにプラスして事業拡大地域づくりはやはり事業につき3回くらいまで可にしたらどうか。

■事務局

- ・1事業につき、3回ということか。

■委員長

- ・継続の事業と捉えるかどうかの判断はあるかもしれないが。
- ・事業拡大に関しては1団体で事業が変わればそのままできるのか。

■事務局

- ・そうである。今の事業拡大支援コースでは応募できる。

■委員長

- ・事業が違ふと応募できるのか。だったら今までなかったということか。

■委員

- ・ない。だから同じものでも継続してもう少しバージョンアップした場合の事業だとできない。そういうものがあつたかどうかはわからないが、考え方として複数の企画というのはなかなか立てられないから。

■事務局

- ・拡大という部分が趣旨になっているので1事業1回と、次は拡大して出してきたねというのがしばりだと思う。

■委員長

- ・まず地域づくり応援コースに関しては26年度までの制度期限があつたわけだが実際問題としてはあまりきていない現状があつたので、意見が出た通り確かに実行できないとダメだということで結構ハードルが高い。

■事務局

- ・当初地域コミュニティ計画を作つたまわりに付いていた考え方だつたと思う。それがなかなか計画を作つてから事業をやるといふと地域にとってはかなり厳しいのかなと。
- ・逆に活動していく中で更にその活動を活発化していく中でその地域の中でそういう計画を立てて計画的にやっていくほうがいいよねというようなかたちに持つていくほうが地域の側としても意欲がわくのではないかなと思ひ、そういうかたちで一本化、事業拡大と統合する方向で考えていた。

■委員長

- ・インセンティブということだつたとすると、地域コミュニティ計画の作成支援というのはどういうかたちでおこなつていくのか。

■事務局

- ・ちょっと考えているのは統合しても計画のあるところは若干高めにして、加点方式にしたかどうかというのを考えていた。

■委員

- ・今の「災害に強い地域づくり応援コース」のように加点することにしようかと。

■事務局

- ・はい。計画性のところで少し加点することを考えている。

■委員

- ・今の話だと成果発表会はどう考えているのか。

■事務局

- ・行いたいと考えている。

■委員

- ・私の認識ももしかすればちょっと違ふかもしれないが、以前、市川地域で事業支援のことで申告しようとしたときに、市川の団体で予算を持つていたのを使い切らなければダメだという、繰越金も全部入れて予算立てしてそれを全部使い切らなければダメだという説明をされたという話を聞いていたのだが、実際そうなのか。

■事務局

・それはうちの補助金か。

■委員

・補助金を使うことによって繰越金も全部使ってその事業をやらなければならないと聞いた。

■事務局

・それはない。

■委員

・そういう説明を聞いていたので繰越金のある団体さんは応募し難いと思っていた。

■事務局

・それはない。

■委員

・勘違いか。

■事務局

・多分団体全体の予算決算のものと、この補助金の区分の事業費の予算決算がごちゃまぜになっているのではないのかという気がする。

・多分補助金をもらわなくてもそれだけの体力があるわけだからという話をされたということか。

■委員

・そうになってしまうので全部使って下さいという説明をされたと聞いた。

■委員長

・団体の剰余金を使って下さいということか。初耳である。

■委員

・繰越金が50万あったら50万では応募できないという感じで、去年から50万繰り越しているのになんで補助金に応募してくるのかという感じか。

■委員

・そういう説明をされたという、

■委員

・でもそれは全体の事業と違うからね特定のプロジェクトの。

■事務局

・そうですね全体の

■委員

・うちの場合は「ふれあい運動会」と運動会に特化していたからしょうがないのかなというのがある。

■委員長

・いやそのしびりはないのでしょうか。

■委員

・聞いたことがない。

■委員

・その当時のうちの担当者が勘違いしているということで。

■委員長

- ・はい、そうかもしれません。

■委員

- ・それだと大変だと思っていた。

■委員長

- ・団体の決算書は資料の中に付いていた。
- ・まずコースの話をどうしようかというのとあとは先ほどのプレゼンについて。プレゼンの負担が大きいというのはよく言われていて考えていた。
- ・やる前の公開審査のプレゼンと終わったあとの公開の成果発表だと2回プレゼンしているのでそれでは大変だという話があって、それも減少している一つの理由という感がある。
- ・今年初めて審査していただいた委員の方々からも意見をいただきたい。

■委員

- ・私はこの制度そのものの良さというか・・・これは是非残していきたい制度なので付いては狙っている効果というか、そこを1度過去に奨励金を得て活動した先の追跡みたいなこともやってみたほうがいいのではないかなと思っている。
- ・教科書的にいえば、新しい公共の担い手として育てる団体があるのかなのかというところを確認する意味でもそういうことをやったほうがいいのではないかなと思っている。
- ・プレゼンに関しては、審査する側もされる側も緊張感を持って臨むわけだから、私は負担になるくらいの方がむしろいいだろうと思っている。

■委員長

- ・18年度から関わったことあって確かにそれこそ18年の一番がまさに先ほどの話に出た運動会、この中で出ているところは結構いろんな結果を生み出して、事業拡大でも結構結果を生み出して素晴らしいものが出来てきて、公開プレゼンも非常に良かったというのが結果としてはあった。
- ・ただ1事業1回なので次がない。それはもしかしたらまた成果として継続性は見られるかもしれない。

■委員

- ・そういう感じはしている。

■委員長

- ・確かに成果を見る機会が多ければ出ている。それはやる団体が減ってきちゃったというか終わってしまったという感じだ。応募できないという。

■委員

- ・やれる団体が皆一巡してしまった。

■委員長

- ・終わってしまったという感はある。
- ・ACTYさんや子ども劇場さん、それこそ皆さんが知っているメンバーが一発目で応募している。

■委員

- ・メジャーの団体全部で一巡してしまった。

■委員長

- ・1回目、2回目で結構出ってしまった。
- ・応募数はあったほうがいい。今のところ、少ないから制度をやめてしまおうかという話にはならないけれども、去年は危機感があった。

■委員

- ・私も初めてなので分からないが、このコースで統合するところがあるようだが、それでは初動期支援コースが10万円限度だけれども、二つ合わせて例えば15万にするなど、ちょっと値上げという考えは可能なのか。
- ・四つのコースだから分散されていたのだけれど三つのコースになるのであれば、少し上乘せして魅力ある金額にしてはどうか。

■事務局

- ・今その初動期のほうは10万円で事業拡大のほう50万円にしているのだが、その金額の見直しというのもあっていいと思っている。
- ・ただ初動期支援については100パーセント補助になっている。だから団体の自己負担がない100パーセント差上げますよというものになっているので、そこを勘案して10万円くらいという想定でこれまでしてきたのだと思う。
- ・ただ時代の推移もあるので皆さんのほうから15万円のほうがいいのではないのかというお話があったりすれば、それでまた検討させていただきたい。
- ・ただ100パーセント補助の部分についてはあまり高額な金額にはできないと思っている。やはりそれぞれ皆さん意識を持って活動されているのだと思うのでご自身の団体でいく分かの負担をしつつ補助を受けていくというかたちが望ましいと思っている。

■委員

- ・たくさん上げるわけではなく、15万というのはせいぜい多くて5団体くらいがもらえるのでせいぜいって25万だなと思うと、15万から20万だったらちょっといいのかなというニュアンスはある。全部助成金として出すのだから50万は望まない。
- ・実際団体からすると15万から20万、10万に対してもいって5団体だ。3団体かもしれないからこの4から3コースになったときにこのお金を合わせるとちょっとは猶予があるのかなと思う。

■事務局

- ・検討させていただく。

■委員長

- ・募集要項的に魅力がちょっと増えるかもしれない。

■委員

- ・そうすると団体数を増やすという目的を考えるとちょっとはおいしいものがないとダメかと思う。

■委員

- ・行政のほうのたたき台としてはその対象経費の事業拡大プランと地域づくりを合体したの

はやはり対象経費の80パーセントというような考え方。事業拡大だから50パーセントではなくて80パーセント、50万円もらおうとすれば60万くらいの事業、大体10万くらい出さなければダメということか。

■事務局

- ・事業拡大という名称もどうなのかと思っはいる。
- ・地域づくり応援コースの応募が少ない理由の一つは対象経費が50パーセントだということが考えられる。
- ・半分持ち出さなければならぬということになると地域にとっては結構な負担になる。

■委員

- ・60万出して30万が自己負担ということだと結構辛いものがある。

■事務局

- ・ということで統合することによって少し対象経費を8割くらいにしておけば現在事業拡大のほうで地域コミュニティ関係の活動をしている団体、実行委員会形式になってきているわけだが、地域コミュニティ活動団体の応募が結構出てきているので、そこをフォローしていくことに意味があるのではないのかという感じがする。

■委員

- ・そう思う。名称もきつと横文字かなにかでかっこいいのを事務局で考えるのだろうね。

■委員

- ・この募集時期について前に何か話ししていたような気がする。
- ・もっと長い方がよいという話が前に出て、いやそうじゃないという話になっているような気がしていたけれどもどうなのか。

■事務局

- ・お知らせをするのに年度に入ってからだと事業が実際に始められるのが奨励金をもらってからだと遅くなるということがあったので、お知らせをする時期を前倒して前年度のうちにお知らせをして事前募集をするようなかたちに変更してきている。

■委員

- ・12月くらいから周知しているというのではなかったか。

■事務局

- ・はい。

■委員

- ・12月に周知してその書類を出すのはあとでも1月でもいいようになったのだよね。
- ・決定通知がいくのは3月だったか。

■事務局

- ・いや、4月のプレゼンテーション後である。

■委員

- ・結局新年度か。年度前には確定しないのか。

■事務局

- ・はい。

■委員

- ・この地域のところの新規事業というのはもう応募できないことになるのか。
- ・地域づくり応援コースの新規事業か事業拡大。拡大に統合されるということは。

■委員長

- ・市民活動でも地域コミュニティどちらでも応募できるようになる。

■委員

- ・それも含めての統合ということか。

■委員長

- ・金額的には初動期支援は10万で補助率100パーセントというかたちで、地域づくりのコースは全額補助ではないので。

■事務局

- ・今のご質問は地域づくりコースの新規事業または既存事業の改善・拡大というところが事業拡大になると新規だとダメなのかというお話か。
- ・事業拡大と地域づくり応援コースを合体したコースは事業拡大という名称ではないものにしたと思っている。
- ・これは必ずしも事業拡大でなければならないものではないものにしようと考えている。
- ・新規の事業でも前からやっている事業の拡大でもそれは考えないというふうに考えている。
- ・ただ例えば地域コミュニティ団体の毎年定例的にやっている既存の予算の中で定例的にやっている事業に対しては補助をするのはどうかと考えている。
- ・例えば盆踊りや運動会などそういう毎年定期的にやっているもののことで、それを拡大するものに助成していったら・・・

■委員

- ・地域の文化財の看板を地域で立てますよと、なんとかの清水とかなんとかの伝説などとか、そういうのをやるのであればいいのだよね。だからそういうのをシリーズで2・3年やってもいいのではないかなと思って3回くらいまでというイメージでいる。
- ・そういうイメージで3回。1回で持ち分があるからできないと。例えば看板を10枚立派なものをつくるとする。そのようなイメージで3回くらいがどうかと思っている。

■事務局

- ・上限の金額の設定のしかたというのが関わってくる。

■委員

- ・「以内」だから自分たちが出せる分で応募して3回計算していけば単年度ではこの分は持てるというのがあればね、50万でなくても。

■委員長

- ・事業拡大支援に関しては比率からいうとずっと市民活動の割合とすれば多い。
- ・コミュニティ活動にしてみれば3対1とかまた無いという状況になっており、どちらかという市民活動なので地域とはちょっとまた違う横断的な課題に対してプロジェクトではないけれど実行委員会ができて応募するというケースが多かった。
- ・その中でこれまで既存でやっているところが新しい事業もしくはこれまでやっている活動

をちょっと変えていきたいと中には事業拡大のほうに応募されているなんていうのも 18 年度のそれこそ市川のことでもそうでしたし、そのへんは割と解釈はそんなに厳しくはない。

- ・応募してきたらこちらもなるべくそういうふうにしてあげようという感じになっているので、そのへんはハードルを上げようというかたちではなく、むしろ新規の方が参加できるようにしようという方向には行くと思う。
- ・要はこのほうがいいのかと私は思っている。

■委員

- ・災害に強い地域づくり応援コースは事務局案ではそのままという話だが、ヒアリングをしたい。というのも、どうしても書類審査だけだとなかなかわかりにくいという感じがしている。
- ・やるほうは負担になるかもしれないが、検討していただきたい。

■委員

- ・これなのだが、他の課で備品かなにかに使える補助制度を作ったようだが。

■事務局

- ・防災危機管理課のほうで自主防の団体、自主防災組織にはその防災の備品を購入するものについての備品に対して例えば補助制度を作った。
- ・こちらのうちの災害に強い地域づくり応援コースは備品を半分まではOKなのだが、15万まではOKなのだが、あくまでも備品を備えるためではなくて活動をするために必要な備品であるということなので、あくまでも事業・活動に対しての補助金という考え方をしている。

■委員

- ・ここは備品ということか。ダブルでもいいのか。

■事務局

- ・大丈夫である。

■委員

- ・今の時点でよいということか。

■事務局

- ・はい。その防災の制度を使って買った備品をただ寝かせて置くのではもったいないと思うので、それを使って何らかの防災の活動をするとか、そういうことの活動をするときに備品とは別な様々な周知をしたりそのときの消耗品的なものが必要になってきたりする。
- ・そういった防災に関連した活動をするために必要なもののために、こちらの応援コースの補助金を使っていただきたい。そういうかたちになるかと思う。

■委員長

- ・ほかに意見はないか。

■委員

- ・特になし。

■委員長

- ・地域づくりコースについて、まずちょっと整理しようかと。まとめはまだ今日しなくても

いいのだが。

- 地域づくり応援コースは私とすれば地域コミュニティに関することはどこかで奨励金の部分では本当は増やしたいという意思はあった。
- これが平成 21 年度から始まってはいたのだけれどなかなかハードルが高い領域の部分があったので、それはちょっと下げていく中で作っておかなければ話にならない。制度ができて使わなければなんにもならないので、そこは方向として考えていた。
- あと事業拡大については本当に 1 事業 1 回で終わってしまうと正直なところ 6~7 年間で過ぎて見ると、活動した上でもう 1 回やってもらったほうがいいというくらいのところも結構ある。
- そのこの団体さんが結局協働の話で 1 度関わったけれどもそのあとどうなったかなというのも非常にそのあとのもうちょっとサポートしていきながらやればいいのかなど思っていたし、そのへんの方向としてはやはり考えていた。
- ただ 1 事業 1 回というのは意見としては変えていく方向もあってもいいのかと思っていた。
- 公開プレゼンに関しては意見が割れた。聞いているほうは結構一生懸命やるのだけれど、やはり大変だというのは実際当初からあった。
- 公開ヒアリングということは、ヒアリング自体は質問等をしていくのは公開にするというようなかたちで、プレゼンまでは予定しないということで、したい方はどうぞというかたちになるのか。プレゼン資料を作る方はどうぞという感じなのか。それともどうなのか。

■事務局

- 公平性を保つためには同じベースでの審査にしないといけないと思うので、プレゼンされるとそちらにどうしても傾く可能性があるのではないかなと思っている。
- プレゼンという意味では、終了したあとに成果発表会のときに「これだけの事業をやりましたよ」ということを見ていただくほうが、周りの皆さんにとっても、「ああこういう活動ができていたのだ」ということを知っていただくことができると考えた。

■委員長

- 他に、「災害に強い地域づくり応援コース」はヒアリングしたほうがいいというのが出た。私もそのほうがいいと思っている。

■委員

- 初動期支援コースと事業拡大支援コース、事業拡大コースは統合するということだが、この 2 つのコースの違いが平成 18 年度から行っているのに、まだ初動期というのが、その位置付けがまだピンとこないというかわからない。

■委員長

- 初動期支援の位置付けは変わらずこのままいくと思う。初動期は活動を始めてから 3 年というのが一番大きな要件となっているので、それを超えている場合は、今まで自動的に事業拡大に応募されていた。
- 審査になってしまうので、審査で点数をつけていくと、どうしても初動期支援のほうは金額が少ないこともあって、割と審査しやすい。そんなにプレゼンの深さは求めていない。事業拡大よりプレゼンの量は多くなる傾向にある。

- ・その中で初動期支援は3年以内なので、御幣がある言い方になるかもしれないが、ライバルはそんなに強くない。3年以上になるとライバルはきつくなる。
- ・そういう意味で3年以内というしぼりは審査するほうとしてはやりやすい。3年未満だから、この辺は質問として加えて聞いていく中でやっていこうという話はしていた。
- ・事業拡大のほうの内容は地域づくりと一緒にしていく中でやったらどうかということだ。
- ・この18年度からの団体さんの一覧を見てみると、結構知っている方々がかつて応募されている。

■委員

- ・今元気がない団体もある。

■委員長

- ・またこういう機会に応募してくれるとありがたい。

■事務局

- ・奨励金の資料を当日にお渡ししてしまったこともあって、意見が出づらい部分もあったと思うので、メールやFAX、電話で後日ご意見頂けるとありがたい。

■委員長

- ・それがいいと思う。委員の半分が新しい委員という中で中身が濃い話をいきなりしてしまったところはある。
- ・今日はここまでにするので、何か意見があれば事務局へお願いします。

次第4 その他

■事務局

～次回の委員会についてのお知らせと「第18回協働のまちづくり研修会」、「わいぐ開設10周年記念交流会」のご案内～